

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.145
2015.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

45

「君は木曾へと 木曾駒山麓上松中学校に (S48 56 1973 81)」

中央道用地内遺跡飯田地区の調査が終わり、調査団本部も上伊那に移転が決まったので、私は学校現場に帰ることを決め、本部と道を隔ててある下伊那教育会館に教育会長を訪ねた。木曾にはない一学年五学級以上の大校で勉強したいと相談すると、君の兄松島信幸が京都大学での地質学の内地留学が終わって帰ってくるので二人は引き受けられない。君は木曾に帰るようにと言われる。学校では人事は校長が進めてくれるが、校長の居ない現場では誰が進めてくれるのかと不安だった。教育会長が木曾教育会長に話してくれたのか、木曾での中心校福島中学と上松中学に話があり、最終的に上松中学に決まった。上松中学校は町が全焼した大火の後、町の中心から離れた寝覚松原地区に建設された新しい学校でした。学校玄関の背景に木曾駒ヶ岳があり、玄関横には大きな松の木が、校地内には小川が流れ、校舍裏側は雑木や松の林が取り巻く自然環境に恵まれた学校でした。そのためか一学年四学級・全校十二学級の生徒は伸びやかで明るく気持ちの良い生徒でした。仲間である教職員も熱心で私も直ぐ打ち解けた。過ぎしやすいことも在って私は3年・3年・3年と三回も学級担任となり9年間も勤めた。

生徒数も多いのでクラブ活動も文科系運動系どちらも活動できて、私は中学生の中に小学生の頃から土器・石器を集めていると聞いて74年に考古学クラブを作った。74年16人 75年16人 76年22人 77年32人と人気のあるクラブでした。全員が考古学に夢中になったわけでは無いが、学年ごとに2~3人の熱心なグループが出来て、その仲間の中では採集する石器の数を、特に石鏃数を競って集めていた。

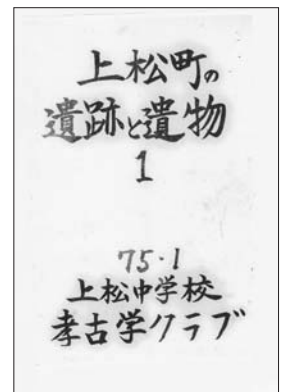
考古学 杉本三弦(信濃こども詩集)

雪のまだ残っている山道を登る/僕は一人きりで山道を登る ふと考える/「だめだなあ こんなことばかり夢中になって」/自分でもわからないうちに 考古学に/夢中になり とけこんでしまう/山道をぬけると 部落が見え

る/心がドキドキしはじめる/この広い畑は 雪が少し残っているだけ/夏には 一面の草 みんなを嫌がらせたが 今は雪が少しだけ/
一人でゆっくり歩きだす/少し探すと 石器があった/「来たかいがあった」 一人でうれしさをかみしめた/「これだから好きなんだ」/一人きりのさびしさ さむさつかれ/この瞬間 気持ちが変わってしまう/苦しさが 大きな喜びに変わる/こんなことが 僕の気持ちをささえている/考古学をやめる こんなことは考えられない/春先 寒さをがまんして登り/夏 汗をかきながら登り 草をかきわける/これからも 友だちと 繰り返しながら 探し続ける

クラブの生徒の中には文化祭の意見発表会や生徒会誌にクラブでの活動を発表し、展示では採集した石器・土器をケースに入れて展示してと校内では活動が知られた。

当初 37遺跡であったが 90遺跡にもなった。朝早く懐中電器を持って地主に叱られないうちに採集をと出かけたり、一つでも新遺跡を見つけようと町内のあらゆる畑を歩いたりした結果の増加でした。生徒の活動は『上松町の遺跡と遺物』1・2とガリ刷りの冊子にまとめた。生徒の多くは木曾高校に進学するが、高校のクラブ活動の地歴部に入ったのは少ない。その中で一人だけ考古学を続け、大学も考古学をと進んだ。野村一寿君は早稲田大学で考古学を専攻した。私は大学同期の塚田光・高橋良治さんが中心になって活動している下総考古に紹介した。縄文中期を勉強し、卒業後は長野県埋蔵文化財センターに就職し活躍する。今は高校教師で考古学から離れていて残念である。



▲「上松町の遺跡と遺物」1

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■田舎考古学人回想誌	君は木曾へと木曾駒山麓上松中学校に	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第138回)	草野潤平 …3
■考古学の履歴書	過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第8回)	岡田淳子 …2	■考古学者の書棚	「纏向」	山下誠一 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 一女として考古学研究者として(第8回) 岡田 淳子

⑧武蔵野郷土館と考古学

武蔵野郷土館は、私の人生最初の職場であった。私が語った半世紀前の当時の様子が「江戸東京博物館紀要 第5号」に載ったが、特別展示、発掘整理、資料収集、会誌武蔵野の編集に明け暮れていたことが分かる。

この博物館は東京西部の考古学者、後藤守一・甲野勇両先生によって企画された『古代の村』をもつ施設で、極めて初期にできた考古学博物館の一つであった。1954(昭和29)年に、井の頭公園から小金井公園内に移設され、名実ともに東京都立の考古・民俗博物館になった。

考古学資料の収蔵品は多く、縄文文化研究の戦後の三羽烏の一人、吉田^{いさる}格氏によって支えられた。縄を棒に巻いて転がす、いわゆる撚糸文期を確立した花輪台貝塚、中期から後期への変化をつぶさに語る称名寺貝塚など、吉田氏が調査研究した遺跡が収蔵資料の土台にあった。

私が勤めていた頃、遺跡の発掘調査は毎年3回前後行われ、私は3年の勤務期間中に9カ所の発掘調査に参加した。一回の調査期間は一週間程度と短い、南関東の遺跡を多く知る得難い機会になった。発掘をしていると通りがかりの人が尋ねる。その質問が、初めは「小判が出ますか?」だったのに、「縄文時代の遺跡ですね」となり、東京オリンピック前の短期間に日本人の考古学に対する認識が、格段と上がったことを感じた。

私が関わった遺跡は、南平遺跡(旧石器時代)、橋立洞穴(縄文草創期)、御殿山遺跡(縄文後期)、吉祥山遺跡(縄文中期以降)、広畑貝塚(縄文後・晩期)など9遺跡であり、東京学芸大学考古学部の学生さんたちが、学びながら労力を提供してくれていた。

吉田さんは若いころ、三羽烏の中で土器型式を最も良く判別できると、山内清男先生に評価されたことを、研究の原動力にしていたように思われる。そして一途に縄文土器研究を続け、関東南部の縄文土器に関しては、第一人者の評価を他に譲り渡すことが無かった。一連の発掘調査の結果は、雑誌「武蔵野」「石器時代」などに報告を載せている。

その中で、霞ヶ浦沿岸の広畑貝塚^{ひろはたかいづか}だけがまとめられずに残った。調査中、お気の毒にも吉田先生は体調を崩され、それでも最終日まで頑張られたが、調査に集中できない状態にあった。それに加えて製塩土器騒ぎが、意欲を失わせたとと思う。霞ヶ浦の水際に近い縄文後期の層で、粗製土器が焼け灰と共に大量に見つかった。それが製塩土器ではないかという見解が出たが、吉田先生は、縄文後期から晩期にかけては、どこの遺跡でも精製土器と粗製土器が相半ばして発見される、製塩土器だという証拠はないと言われていた。一般に粗製土器がそんなに多いということ、知る人は多くなかったであろう。私が早くに郷土館の職を辞してしまったこともあり、それらのことが重なって、広畑貝塚の資料の大部分は、いまでも日の目を見ないままである。

武蔵野郷土館と一緒に働いていた人たちは、みんな気持

ちの温かい人ばかりであった。私が半端な臨時職員であったにもかかわらず、決して差別することなく気持ちよく接し、最大限に助けてくださった。その方たちに支えられて、私はただかまり無く仕事のできたのである。それでも2年目が終わるころから、これで良いのかと疑問をもち始めた。非正規職員のため収入が著しく少ない。当時、日雇い人夫を日給が240円という意味で、「にこよん」と呼んでいたが、私もそれに準ずる待遇であった。現在の非正規職員問題を聞く度に、かつての状況が思い出され、少しも変わっていないことに心が痛む。

東京都の臨時職員には、正職員になるための内部だけの試験があった。その時期がやってきて、私は早速希望を出したが叶えられなかった。博士課程を出たものには受験資格がないという。学歴を修士課程までにすると、学歴詐称になるとも言われた。同じ部局内の獣医師は専門性が担保されているのに、考古学の専門性が認められないのは何故か、基礎科学で成果が見え難いからなのか、考古学は世の中の役に立たないと思われているのか。自問自答の末、私は考古学と女性が好まれていないという思いから、生き方のスイッチを切り替えることにした。それでもしばらく仕事を続けたのは職務内容に魅力があり、まわりの同僚たちが良かったからである。

その頃、東京都職員組合で臨時職員を正職員にしようという機運が高まり、組合の中に「臨時職員対策部」ができた。その対策部長から臨時職員部を作るので部長になって欲しいと交渉され、私は初め消極的だったが、多くの人々が助かるという意味を理解して、運動に参加することにした。これは私にとってもストレス解消に役立つ、その後運動が実って、1964年10月から公園の該当者たちが正職員になれると決まった。私はその人たちにとっても感謝されたが、当の私は秋からの米国留学が決まり、その恩恵を活かせなかった。結果として考古学の正規ポストを一つ失ったことを、長い間申し訳ないと思っていた。



▲都立武蔵野郷土館の古代の村 弥生時代高床倉庫(復元)の前で 1962年6月

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 138

国史跡 大室古墳群 ～長野県長野市～

草野 潤平

私にとって特に思い出深い遺跡は、大学に入学した1999年から7年間、毎夏発掘調査に参加した大室古墳群である。長野市街地の南東約6kmに位置し、真田氏の城下町^{まつしろ}を中心とする山丘地帯に営まれた、古墳総数約500基を数える東日本有数の大群集墳として知られる。標高1,100mの奇妙山から派生する3つの支脈尾根とそれに挟まれた2つの谷筋^{まつしろ}に分布し、古墳のまとまりと地形条件から北山^{きたやま}・霞城^{かじょう}・金井山^{かないやま}・大室谷^{おおむろに}・北谷^{きただに}の5支群に大別される。莫大な古墳数もさることながら、墳丘を土盛りではなく石積みによって築く「積石塚」と、天井石を切妻屋根形に組み合わせる架構した「合掌形石室」という全国的に稀な墳墓様式によって古くから注目されてきた。というのも、こうした墓制の類例が朝鮮半島に認められること、また長野県において馬具・馬骨などの出土が多いことに加え、『延喜式』に記載された「大室牧」・「高井牧」といった官牧名が古墳群近隣の地名に対応すると考えられることから、馬匹生産に長けた渡来系技術者集団の墳墓とみる被葬者論が展開したのである。1984年より明治大学考古学研究室が継続的な学術調査を行い、1997年に241基の古墳からなる大室谷支群の一部が国史跡に指定されてからは、長野市教育委員会が史跡整備に伴う試掘・確認調査を進めている。

積石塚が全体の7割近くを占める大室古墳群の代表的事例といえば、合掌形石室を埋葬施設とする積石塚古墳の典型例で豊富な須恵器・土師器・埴輪と馬形土製品がセットで出土した5世紀後半の168号墳（通称「大平塚」：写真1）、あるいは大室谷の入り口にあって石垣状石積みを配する腰高な墳丘に古墳群中最大規模の横穴式石室を内蔵する7世紀初頭の244号墳（通称「将軍塚」：写真2）などを挙げるべきだろう。私自身、168号墳については1993～1995年に実施された発掘調査の報告書作成に従事し、244号墳については史跡整備に伴う墳丘外部構造の確認調査に参加しており、それぞれ思い入れ



▲写真1:
大室168号墳（『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』より転載）

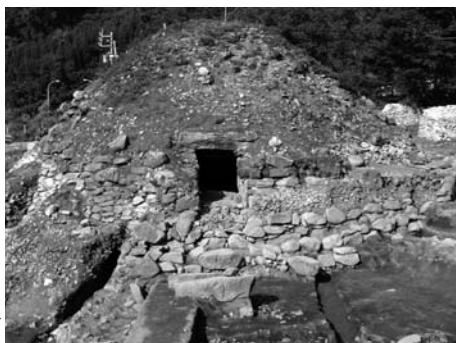


写真2: 大室244号墳
(2003年 筆者撮影)

のある古墳であるが、今回は大室古墳群を構成する他の古墳のなかから自分が調査に携わった印象的な事例を2つ取り上げたい。

1つは、1999年の発掘調査1年目に担当した村東単位支群の29号墳である。北西側に隣接する28号墳とともに後世の削平・改変が著しく、墳丘が判然としない集石状を呈していた。炎天下、先輩に指示されるまま掘り出してはみるものの、表土下の状況も表面観察の所見と大きく変わらず、およそ9m四方の範囲に大小無数の礫が散乱しているような有り様だった。古墳自体まともに見学したことすらない者が初めて発掘調査を経験する対象としてはいささかハードルの高い遺構であり、調査期間中終始頭を悩ませていた記憶が鮮明に残っている。結局、裾石や人為的な石積みなど古墳に伴うことが明らかな構造は確認されなかったが、集石範囲の中央付近で埋葬施設との関連が考えられる大型板石が2枚検出され、また黒斑のある埴輪片が多数出土したことから5世紀代の積石塚古墳と結論づけられた。2枚の大型板石は地山層に含まれる自然石と判断されたが、想定される墳丘内での位置を勘案すると埋葬施設に関連する可能性は否めず、その場にあった自然石を動かすことなく利用したと捉えることもできるだろう。29号墳の大型石材利用は、古手の合掌形石室と目される156号墳の扁平板石を丁寧に重ね合わせた天井構造などと比べて明らかに異質であり、大室古墳群形成期における埋葬施設の一形態として、こうしたイレギュラーなものも認められるのかもしれない。

もう一つは、2001年に担当した鳶岩単位支群の31号墳である。大室谷扇状地の北縁に立地する天井石の露出した横穴式石室墳で、石室の特徴から7世紀前半に位置づけられる。調査当時は石室全体が簡易な小屋組みで覆われ、段々畑の石垣に墳丘が取り込まれたような状況だった。奥壁と西側壁の裏側にトレンチを設定して掘り下げたところ、墳丘内部に埋め込まれた石列とその外側に施された盛土層を確認したが、この盛土層には大いに驚嘆させられた。盛土は移植ゴテで叩くとキンキンと金属音がするほど版築状に堅く叩きしめられており、ツルハシやタガネ・金槌を使った掘削作業は鉱山での採掘を彷彿とさせるものだった。後年、東京都武蔵府中熊野神社古墳の調査で首長墳クラスの版築状盛土を掘った経験もあるが、31号墳の盛土の方がはるかに硬質であったと思う。盛土の少ない大室古墳群において、こうした土木技術がどのような経緯で成立したのか、興味が尽きない。今回紹介した2例は古墳群全体の一端を示すに過ぎず、バラエティ豊かな古墳群の実態が今後の調査・研究の進展によって明らかにされていこう。

さて、私は2010年から生まれ育った東京を離れ、山形県埋蔵文化財センターに奉職することとなった。思えば1999年の大室古墳群調査に続く第2の調査現場は、同年秋に訪れた山形県川西町下小松古墳群であり、山形県南陽市に合掌形石室を埋葬施設とする積石塚の松沢2号墳が存在する点を含め、長野での古墳調査に始まる不思議な繋がりを感ぜずにはいられない。学生時代から積み重ねてきた感動・経験の延長上に今の自分があることを忘れず、日々の業務と研究に勤んでいきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは天本昌希さんです。

考古学者の書棚

「纏向」

石野博信・関川尚功 著／桜井市教育委員会(1976)

山下 誠一

私は大学時代社会学を専攻して考古学を学んではいなかった。はじめて発掘調査を体験したのは、昭和49年8月の大学2年の夏休み、郷里である長野県飯田市の『南の原遺跡』での作業員のアルバイトからである。中世の松尾城跡に係わる居館の一部の調査であったが、まだ考古学には少し興味を持った程度であった。翌年の昭和50年にも、飯田市の『清水遺跡』の発掘調査を作業員として体験した。古墳時代前期から中期の遺構・遺物が多量に検出され、方形周溝墓の主体部から出土した42点のガラス小玉が印象に残っている。発掘調査も2年目ということもあり、調査補助員的な役割をこなすこともできるようになり、考古学への興味が少し増していった。しかし、将来の職業になるとはその時は考えていなかった。

昭和52年3月に大学を卒業したが故郷での就職活動に失敗し、その時始まった国道153号座光寺バイパス建設のための事前調査である『恒川遺跡群』発掘調査の調査員として働きはじめた。恒川遺跡群は長年の発掘調査・確認調査により、その一部である正倉域・恒川清水などが平成26年3月に国史跡『恒川官衙遺跡』に指定されており、縄文時代以降連続と続く複合遺跡、古代伊那郡衙としての官衙遺跡として広く知られている。その端緒となった調査であり、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺構が複雑に重複し、土器・石器をはじめとする遺物も多量に出土した。発掘調査の調査員としては、それまでの2回の発掘調査アルバイトの経験はものの役には立たなかったが、複雑な現場に鍛えられて徐々に役割を果たせるようになっていった。発掘調査をとおして考古学の楽しさ奥深さを学ぶことができ、文化財保護関係の仕事に携わりたいと考えるようになった。現場の作業は経験を積むことによってこなせるようになってきたので、考古学の基礎知識を得るために、考古学関係の入門書や講座本で少しずつ勉強をはじめた。しかし、独学ということもあり、なかなか身に付くものではなかった。

恒川遺跡群の発掘調査が終わりに近づいた昭和56年、学芸員の資格取得と考古学の基礎を学びたいと考え、筑波大学に聴講生として1年間勉強することを決意した。この頃、筑波大学の岩崎卓也先生が前方後円墳の調査などでたびたび飯田市にみえられており、お話を伺う機会があったことも一因であった。筑波大学では学芸員資格取得のための講義の他、考古学関係のいくつかの講義を受けることができた。岩崎先生の講義は、前期では古墳時代の土器の名称について坪井正五郎から始まる学史や佐原真の土器制作について、後期では古式土師器を主体とする基本的な資料の見方について、近畿地方関東地方までから順に基礎的な論文を基にしたものであった。毎回手作りの資料をご用意され、たいへん分かりやすい講義であった。畿内の布留式土器・庄内式土器、東海の欠山式土器・屋敷式土器、関東の久ヶ原式土器・弥生町土器・前間町式土器等の学史や特徴を学ぶことができた。毎回の講義をノートに書き、我孫子市に借りたアパートの一室に戻って復習しながら清書し

た。講義で使われた論文については、筑波大学の図書館でコピーして読み直した。恒川遺跡群の調査をとおして弥生時代から古墳時代の土器について興味を持っていたが、こうした講義を受けることによって自分の専門分野とする決心がついた。

昭和57年に筑波大学での1年間の聴講性生活を終えて飯田市に帰郷し、本格的に始まった恒川遺跡群の整理作業に携われることとなった。遺物については調査員それぞれに分担を決め、私は自ら希望して弥生時代から古墳時代前期までの土器について担当することになった。出土量が膨大であり、整理作業の前半は復元できた土器を図化することに明け暮れた。そうした作業をとおして、少しずつ課題も明確となり、これまで不十分であった弥生時代から古墳時代の土器編年ができるのではないかと考えるようになった。そこでであったのが石野博信・関川尚功著 檀原考古学研究所編／桜井市教育委員会発行の「纏向 奈良県桜井市纏向の調査」である。

本書は、本文596ページ・図版240葉・付図6枚にわたる大冊である。纏向石塚古墳の調査などもきわめて重要な報告であるが、私が参考にしたのは関川尚功氏が担当した古式土師器の部分である。岩崎先生の講義によって土器についての基礎知識を得ていたが、多量に出土した弥生時代から古墳時代の土器を発掘調査報告書に掲載し、土器編年を考察するには力不足であった。土器の分類やその図版への掲載方法、土器編年の記述方法など熟読して参考にした。また、恒川遺跡群では東海や畿内からの外来系土器が多く、纏向遺跡の外来系土器や各地との併行関係も大変役だった。それが結実したのが飯田市教員委員会発行の『恒川遺跡群』(1986)であり、弥生時代から古墳時代前期の土器を10期に細分した恒川編年を示すことができた。土器形態分類図や各地土器の併行関係表などの図版・表は「纏向遺跡」の方法を真似て提示した。それまでの当地方の発掘調査報告書は、ともすれば資料提示に留まっていた。「纏向遺跡」は、発掘調査で得られた課題を考察として提示した発掘調査報告書となっており、そうした姿勢を含めて大変影響を受けたと今でも考えている。

「恒川遺跡群」を執筆した頃は20代の後半であった。この頃にほぼ3年間をかけて土器と格闘したことが、その後のいくつかの論文につながったと考えている。現在は60歳を過ぎて飯田市教育委員会を定年退職し、ひきつづき臨時として文化財保護に携わっている。私は大学で考古学を専攻しなかったが、発掘調査現場やそうした活動をとおして出合った人達から学んでいくことができた。今はともすれば日々の仕事に追われ、勉強する意欲が失われている。筑波大学や「纏向遺跡」で学んだ原点を忘れてはいけないと自戒する日々である。

アルカ通信 No.145

発行日	2015年10月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp